

勤労感謝の祝日、9:55 集合 10:00 開始の NPO 法人漱石山房・史跡探訪分科会ウォーキングに参加させていただいた。委員長の長尾剛さん、そして案内役は 500 の坂を歩いたという黒田さん。予報は曇りであったが、歩く日は必ず晴れるという黒田さんと若干 1 名の晴れ女のお蔭(?)で、暖かい青空の下、黒田さんが用意くださった地図と資料をもとに、新宿区早稲田の穴八幡宮から 8 名でスタートした。

この穴八幡宮は蟲封じ・商売繁盛・出世開運の神様であるが、漱石の神経衰弱に困り果てて占い好きになったという鏡子夫人が(おそらく託宣により)、漱石の癩癩を治すために「蟲封じ」のお札をいただいた神社である。自宅の玄関扉の真上の壁に毎日少しずつ五寸釘でお札を打ち付けて、それが完了すると癩の虫が封じられるはずだった。ところがある日、夫人が漱石を送り出した後でお札を打ち付けていると、勘が働いたのか偶然か、外出した漱石がすぐに引き返してきた。現場を見て「なんだッ、これは」と怒ってお札を破り、足蹴にしてゴミ箱に捨ててしまったそうである。

その境内で黒田さんから、徳川吉宗が世に蔓延した疱瘡平癒を祈願して流鏝馬を奉納した話と、近くにやっちゃ場(青物市場)があったという話を聞く。流鏝馬については鳥居の横に銅像がある。やっちゃ場の語源は「やっちゃ、やっちゃ」という競り声からきているという。『硝子戸の中』(19 章)には「いーやっちゃ若干」という言葉が記されている。境内右奥には八幡様の三つ巴の御紋を扉に付した町ごとの蔵が並んでいて、漱石が住んだ「早稲田南町」の蔵を見つけて皆喜ぶ。さすが漱石ファン。漱石に関わるどんなことにも「ウレシイ！」が顔に、言葉に出る。そんな気分ですの右手の道路へ出て、いよいよ町中へ歩き出した。

交差点角に、中山(堀部)安兵衛が高田馬場で敵を討つときに升酒を一杯ひっかけたという「小倉屋」という酒屋がある。「オグラヤ」と読まれるのでわざわざ「KOKURAYA」という看板を掲げている。漱石はその升を見たことはないが、娘の御北さんの長唄をよく聞いたと『硝子戸の中』(19 章)に記している。その昔、この酒屋に泥棒が入ったとき、頭を抜身の先でつつかれた半兵衛さんが、頑として「金はない」と断ったあげく、11 ヲ町を治める町方名主であった「裏手の裕福な夏目さん」を紹介してしまったおかげで漱石の実家に泥棒が入った話が同 14 章に記されている。そこは交差点の反対側から眺めて終わり。夏目坂入口の牛井屋前に建っている「漱石誕生之地」の碑は全員知っているので見学せず、向かいの歩道から坂を上っていく。

坂の途中、右手にある誓閑寺に立ち寄る。この寺は『硝子戸の中』では豆腐屋について曲がると半町程先にある「西閑寺」、『二百十日』では豆腐屋の角から一丁ばかり上がったところにある「寒磬寺」と名を変える。半町と一丁の差があるが、豆腐の単位も「丁」と数えることが思い浮かんだ。梵鐘を見学して寺を出る。少し上のほうで交差する道路を見たとき、黒田さんから「この道は江戸時代からある」という説明を聞く。このほか、いたるところで江戸時代からあるまっすぐで広い道路を見る。江戸の町の整然さをうかがわせると同時に、それを残した新宿区に敬意を表する。そこから左へ渡って狭い路地へ入ると、わずかに広がった道路右手に早稲田幼稚園・小学校がある。長女の筆子さんは日本女子大附属の学校へ通ったが、漱石の病気による経済

変化もあり下の子供たちはここへ通った。漱石臨終のとき、危篤の知らせを受けた筆子さんは、急ぐあまり乗っていた人力車が横転したが走って帰って間に合った。他の子供たちは近くて不幸中の幸いだった。因みに漱石の子供は、筆子さん、恒子さん、栄子さん、愛子さん、純一さん、伸六さん、ひな子さん（夭折）の2男5女。

ほどなく着いた漱石公園。正門に建つ漱石の胸像（富永直樹作）が迎えてくれる。向かって右の碑面には「則天去私」の碑文が、左の碑面には「ひとよりも空 語よりも黙」の言葉と「肩に来て 人なつかしく 赤蜻蛉」の句が刻まれている。園内に入ると左手の回廊近くには、病に伏せった漱石が硝子戸の中から見た「芭蕉の木」と千両・万両の実のように赤い「梅もどき」が植えられている。もうひとつの白っぽい緑の膝丈くらいにまっすぐ伸びた植物の名前は失念してしまった。長尾さんは、穴八幡宮、誓閑寺、漱石公園一3度目の「房州石だ」という感慨深げな言葉を発する。房州石は漱石が住んでいた当時の擁壁の石である。この公園ではそれを再現している。

慶應3年（1867年）^{うしごめばばしたよこまち}半込馬場下横町（現：喜久井町）に生まれた漱石は、養子先の塩原家（内藤新宿北町裏 - 浅草三軒町 - 内藤新宿北町）一千駄木（猫の家）一西片を経て、この生家に程近い早稲田南町で終焉を迎えた。縁とは不思議なものだ。

公園内の『道草庵』ではビデオが見られるというので、20分程「漱石公園落成」の模様を鑑賞する。そばに投句箱があったので2句詠んだ。目と耳はビデオ、その最中に脳の一部がひそかにアルバイトしたような「なんだ、こりゃ」の俳句。

そこから山鹿素行の墓がある「宗参寺」—これもまた江戸時代からあるという広い道を通して「大願寺」—『門』の中で「円明寺」として描かれているという宗柏寺。それぞれ敷地には入れないので、外で黒田さんの説明「漱石が見た景色」に耳を傾ける。作中命名で少し気になるのは松山に「円明寺」という寺が実在すること。

そうして落語好きな漱石が通った寄席もあったという『吾輩は猫である』『それから』に登場する地藏坂（別名：藁坂）を通して「矢来公園」に到着。我々はすでに小浜藩・酒井藩主の広大な屋敷跡地を歩いている。通用口から入って正門から出るコースだが、あまりにも広い。将軍も遊びに来るはず。どれほど広いかというと『硝子戸の中』に「神楽坂へ買い物に出るために、矢来の坂（別名：滝の坂）を上がって、酒井様の火の見櫓^{やぐら}を通り越して寺町へ出ようとすると五六町ある」という内容が記されている。まるで空の光りをふさぐように、多くの木が茂っていた一角にあった古い半鐘は、その下の一善飯屋のおいしそうな匂いとともには漱石の記憶に残ったようだ。子規がまだ生きて根岸の家（現：子規庵）に住んでいたころ、漱石は『半鐘と並んで高き冬木哉』という句を詠んだ。それがこの辺りの当時の景色だったのである。公園の真ん中にはオバマ大統領と同音で注目された「小浜」藩の平らな碑と並んで、この酒井家の敷地内で生まれ、お抱え医師となった「解体新書」で有名な杉田玄白の碑が立っていた。

矢来公園から新潮社倉庫へ向かう。近くの横寺町には漱石の弟子・森田草平が住んでいた。そのあたりを通して、見合い後の漱石と鏡子夫人がそれぞれの人力車に乗って、互いに相手が声をかけると思っすれ違ったという神楽坂をわたって赤城神社へ。予定外の漱石山房での嬉しいビデオ鑑賞もあり、ここで12時20分になったのでお昼休憩。それぞれが思い思いの店へ散らばった。

お腹が満たされたところで午後の部スタート。赤城神社本殿への石段を上り、黒田さんが「昔の写真と比べて趣がなくなった」と残念がった神社左手奥にある急な階段を下り、少し先を右手へ折れる。赤城下町—改代町—山吹町—関口を通して大日坂前

の商店街へ出る。『明暗』で津田が小林に「飲みにいこう」と引っ張られた店がこのあたりにあったとか。『それから』で、代助が住むこちら側から三千代が住むあちら側へ渡るために、^{はなみず}華水橋という連想上微妙な名前の橋を渡っていく。『それから』当時は4つか5つの橋があり、代助が渡ったのは中之橋といわれている。

橋を渡って右手に折れ、しばらく歩くと左手に本法寺がある。夏目家の菩提寺であり、また『坊ちゃん』の清の墓である「小日向の養源寺」のモデルでもある。漱石は長兄・大介の死について明治22年「兄の死」と題するスピーチを行った。また母・千代の命日に「梅の花 不肖なれども 梅の花」という句を詠み、それが境内左手にある石碑に刻まれている。墓マイラーではないが、せっかく来たのだからと、ちょうど墓参していた女性に夏目家の墓を教してもらい皆で神妙に墓を見て寺を出た。

正門から左に折れて、あやかりたい名前の金富小学校を通過し『それから』の代助と三千代が往来し『明暗』のお延と継子がすれ違い、永井荷風が『日和下駄』に描いた「金剛（寺）坂」を上り、松山へ行く前に漱石が下宿していた伝通院の隣にある法蔵院（旧：小石川表町73番地）へ。普通のお寺なので、トーンを落として黒田さんの説明を聞きながら会話する。漱石が眼医者で会った女性の話が皆の口から出る。時間が押してきたので伝通院の中に入るかどうか相談したが、結局入ることにした。この界限は『それから』『こころ』に出てくる。伝通院は芝・増上寺、上野・寛永寺と並ぶ3大寺院のひとつ。徳川家康ご生母・於大の方、側室・於奈津の方、秀忠（二代将軍）の長女・千姫、そのほか現代著名人の墓もある。女性の墓のほうが大きいそうだ。生母＝聖母ということか。私は天高くそびえ立つ大きな灯籠のような墓石に荘厳さを感じた。死してなお偉大なり。

伝通院を出て善光寺坂を下り小石川3丁目交差点を右に折れて蒟蒻閻魔・源覚寺へ。その名前は『吾輩は猫である』のほかに『こころ』の「先生」が若いころ下宿していたとき通った場所として登場する。「蒟蒻閻魔」の由来は、目を患った老女に自分の片目をあげた閻魔のために老女が大好きな蒟蒻絶ちをしたということで、眼病にご利益があるそうだ。

さて、次の目的地、漱石が住んだ西片の家を訪ねるべく向かいの白山通りの信号を渡って左に折れると、ビルの一角に樋口一葉の碑が。花が供えられていたので、きょうが一葉の命日であったことに気づく。漱石と住まいも近く、義姉あるいは恋人になったかもしれない一葉。ゆかりのところは後で寄るとして、まずは漱石旧居跡へ。広島・福山藩中屋敷の名をとどめた急勾配の福山坂を上ると左手に「西片ロ-7」番地であった場所に一軒の家が見える。ただし現在は別の一家が漱石転居後から代々住み続けているので、やはりトーンを落として静かに見る。東大通勤至便で多くの教授が住んだため「学者街」と呼ばれた瀟洒な住宅街を抜けて、樋口一葉が通ったという質屋「伊勢屋」に行くと「一葉忌限定公開」とある。しかも閉館30分前の超ラッキー。見学することができた。折しも一葉に関する新刊本の著者が到着したばかりで、著書を購入するとサインをいただけるという、人によっては再びラッキーなシチュエーション。ここも予定外の学び時間。伊勢屋前の菊坂を本郷三丁目方面へ歩くと、右側の路地を入ったところに一葉住居跡がある。今はポンプ式井戸しか残っていないが、その蓋の上には白百合の花が添えられていた。あまりにも近すぎる住居の人々に迷惑をかけないように路地を無言で通過した。炭団坂一文京ふるさと歴史館（時間がないので通過）一階段を上って坪内逍遥ゆかりの地。再び菊坂へ出て、文人地図も販売する「菊坂コロッケ」で有名な「まるや肉店」の前を通り越し「金魚坂」という金魚屋兼飲食

店に入った。昔からの造りそのままのレトロな店内で、メニューは黒カレーと和定食、パンの軽食。アルコールは各種あるのに、おつまみがなくて残念。アルコールは食事のお供か。ここが本日の終点となった。

さて、ここまで書いて、ウォーキング前に黒田さんからいただいた資料の中にあった「きょう歩けば答えられる 12 問のクイズ (3~5 択回答形式)」のうち 10 問 (末尾に簡略に記す) の回答を文中に織り交ぜた。当初の終点予定・東大まで行けなかったのも 2 問残った。それについては以下にストレートに答えよう。

まず第 11 問目。『三四郎』に登場する本郷三丁目の西洋小間物屋は「長島屋」だと言われていますが、日本小間物屋はどこでしょう？—答えは「かねやす」

この「かねやす」は 1735 年、歯科医の兼康祐悦が「乳香散」という歯磨き粉を売ったのが始まり。元祖争いが起こって、町奉行より店名をひらがなで記すよう裁定が下った。店の碑面にある川柳『本郷もかねやすまでは江戸の内』は、1730 年の大火の際、大岡忠相が「ここから南の江戸城に近い側を土蔵造りの塗屋にする」と決めたため、かねやすの土蔵までが江戸となったことを詠んだもの。

そしてラストの第 12 問目は古い写真。ここは一体何処でしょう？—答えは神楽坂。



先に出てきた大岡越前にならって「これにて全問落着」

きょうは天気も歩くペースもちょうど良かった。盛りだくさんの説明のお蔭で、ただおしゃべりをして歩くよりも心身のバランスが良かったのだろう。またゆっくりと食事をとれたこともリラックス効果があり良かったのかもしれない。最後まで疲労感なく楽しく歩けた。漱石の作品を一通り読んでいても、いかに記憶から欠落している部分が多いか、いや、欠落どころではない。いかに読み飛ばしているかが明らかになったウォーキングだった。「知る」ということは深い。長尾さん、黒田さん、お世話になりました。そして皆様お疲れ様でした。

【クイズ】

例題:「漱石 4 女の名前は?」「漱石が住んだ土地の順番は?」(この回答も文中にあり)
問題:「穴八幡宮でのおまじないは?」「矢来の鐘を詠んだ俳句を発表した子規庵のある場所は?」「横寺町に住んでいた漱石の弟子は?」「『それから』の代助が渡った橋の名は?」「本法寺で母の命日に詠んだ俳句は?」「代助と三千代が行き来した金剛坂を描写した『日和下駄』の作者は?」「漱石が下宿した小石川表町 73 番地のお寺は?」「菟藟閻魔の寺の名は?」「西片に名を残す藩の名は?」「菊坂にある飲食店の名は?」